

源平盛衰記卷廿八壽永二年加賀國安宅落城の段に云ふ。富樫次郎家經は黒糸威の鎧に鴉毛の馬にぞ乗たりける。三十餘騎にて落ちけるが、郎等共に防ぎ矢射させて、引返し引返し戦ひける程に、馬の太腹を射させてひき落さる。富樫が外威の甥に安江二郎盛高と云ふ者あり、續いて落ちけるを見て、如何に安江殿、家經馬を射させたり。乗つべき馬や侍るといへば、名をば誰ともささず、四五騎有りける郎等に向つて、大様々々と其の馬進せよとて落行きけり。今參りに新三郎家員と云ふ者、我が乗つたりける鹿毛なる馬の逸物なりけるより飛下りて、後の奉公に立て給へかして、富樫介をかきのせたりければ、北をさして落行きぬ。家員が馬なくば、家經危くぞ見にける云々。とあり。三州志隼藝餘考に、盛高は富樫泰家外威の甥と云ふ。安江八幡社を安元二年に盛高再興すと云ふ。今の金澤鍛冶町八幡社是なり。但し其の再興の社地は、今深見家第地也と云ふ。とあり。平次按ずるに、安江氏の子孫は、藤原野季瓊日録に長祿二年八月四日加賀國安江庄内安江八郎左衛門入道跡、康正二年九月攝津守押領云々。といふと見られたれば、盛

高以來安江庄を所領せしなるべし。官地論に、長享二年六月石川郡高尾籠城討死人の中に、安江彌太郎安江三郎といふ人見ゆ、落城の時割腹人の中に、安江和泉といふ人も見たり。皆安江氏の一族なりと聞ゆ。

○掛造橋

金澤橋梁記に、かけづくり橋三社。とあり。此の橋は、穴水町の尻地長土塀通御荷川の下流に架けたる橋也。此の橋より以北を三社臺とす。故に三社掛造橋とも呼べり。此の橋爪に、川の上に掛造の家あり。依つて橋名とすといへり。

○三社五十人町

舊藩中は輕卒の組地也。犀川石坂にも五十人町あり。是も輕卒の組地なり。故に三社五十人町・石坂五十人町と呼べり。

○五十人組輕卒來歴

湯淺淺良の足輕組宛行考に云ふ。先筒足輕大屋彦太郎由緒書に、元祖大屋九郎右衛門は、高德公越前府中にて、鐵炮之者五十人外に小頭五人被召抱、小塚藤右衛門へ被預。則九郎右衛門小頭相勤め、右五十五人へ、小頭へは七拾石宛

五人分三百五十石、平五十人へは四十石二斗宛五十人分二千拾石、都合二千三百六拾石越前本保村に於て賜之。能登へ入國し給ふ後、羽咋郡山刀打村にて賜之、金澤へ入城し給ふ後、石川郡木津明嶋村にて賜之。小塚藤右衛門死後、小塚權太夫組に成り、小塚淡路代まで被預と云ふ。此時三社へ引越す。五十人町の名は是を起本とすと云ふ。其子宅右衛門も右之通の宛行高にて、淡路組に罷在處、元和四年一統の知行所被召上、小頭へは更に切米五十八俵賜り、其の内にて小者一人召抱、平生は普請會所へ指出置き、小頭役にて地、他國用事相勤むる節は、引揚召連れけり。其節より先筒足輕の名目と成り、平足輕へは二拾九俵宛賜はり、村上豊前組と成り、其の後宮木采女組と成る。寛永十二年右小頭の小者米十三俵被召上、三拾五俵宛に成り、小者は賃人渡る趣に成る。寛文七年小堀孫兵衛組に成り、宅右衛門死後、其の子兵右衛門被召抱、寛文九年切米二拾九俵賜はり、天和二年病死、其子喜兵衛同年被召抱、二拾俵賜之。是より先年物頭組足輕宛行、小頭三拾俵、平二拾俵に相成る。とあり。右大屋彦太郎由緒書此の如く、彦太郎之外芝

原半助・野村藤七・井上吉平三人の由緒書も同様也。此の人々は皆先手筒頭田邊判五兵衛元組也。相組改田主馬組にも有之。五十人之内立身も可有之、多分は其家筋退轉し、右兩組に僅に残るといへり。平次按ずるに、享保十六年に指出せる森平藏由緒帳に、曾祖父森久右衛門、於越前府中御鐵炮之者五拾人外に小頭五人都合五十五人被召抱、小塚藤右衛門組に被仰付。五拾五人へ二千三百六拾石、越前國本保村に而被下、能州御入國以後同國なうち村に而被下、金澤御入城以後石川郡木津明嶋村に而被下置由承傳申す。と見ゆ、同年井上十右衛門由緒帳に、高祖父井上重右衛門、於越前府中御鐵炮之者五拾人被召抱、小塚藤右衛門に御預け、右五十人へ二千拾石、越前府中本保村に而被下、能州へ被爲入、なた打村に而右之通被下、天正十一年金澤へ御入城、石川郡木津明嶋村に而同様被下。同十三年小塚藤右衛門江州柳ヶ瀬に而討死之後、小塚權太夫へ御預け、同年能州石動山御合戦之時分御供仕り、權太夫死去之後小塚淡路へ御預け。元和四年一統知行所被召上、御切米三拾五俵外小者米被下之、村上豊前へ御預け。寛永十